

大通公園を望む窓辺から

靴音

副会長 小熊 豊

カツ、カツ、カン、カンと女性がせわしなく歩く靴音を、街中の通路や階段、地下鉄ホーム、さらには建物、職場内でもしばしば耳にする。よく響き渡る何ともハイピッチな音で、こんな騒音をたてながら歩くことを何とも思わないのかと、私には不思議でならない。

かなり以前に、真剣に討論を繰り広げていた学会場で突然会場内に女性の靴音が溢れ、暫し話が中断されたことがあった。それ以来、所かまわぬ靴音には少なからぬ抵抗感を抱くようになった。

軍靴の音ならぬ、女性企業戦士の靴音なのかと思いきや、そうでもない。若いも若きも多くの女性が、さまざまな場所で甲高い靴音を鳴らしながら闊歩している。あたかも自己の存在を靴音でアピールでもしたいかのように聞こえてならない。排気ガスのけたたましい音を撒き散らす違法改造車とまでは言わないが、迷惑な靴音には現代の自己中心的な放任姿勢が垣間見える気がして、もう少し周りを思いやる優しさ、気遣いがあっても良いのではないだろうかと思う。

女性靴の構造はよく分からないが、歩行時に音を立てないように靴を作ることは今時いとも簡単なことだと思ふし、女性にはもっと静かに、優雅に歩いて欲しいと願うのは私のわがままなのだろうか。それとも、初老の男の変に歪んだこだわりなのだろうか。

(ちなみに私は、タップダンスやフラメンコの華麗なステップによる靴音は大好きです)

恩師と学会の思い出

監事 中村 興治

毎年3月には翌年度の全国学会の開催日が公表される。私は科を問わず開催地とその日程を見て楽しんでいるが、もちろん注目は耳鼻咽喉科関連学会である。

そこで思い出すのは我が恩師、北大耳鼻咽喉科学講座第4代教授である寺山吉彦先生の晩年にお供した学会である。

昭和48年秋、当時北大耳鼻咽喉科寺山教室は厚生省突発性難聴調査研究班の班員として、本疾患の疫学、病因、臨床の研究に教室を挙げて取り組んでいた。昭和41年入局の私も本疾患の聴力像の経過観察とその予後について研究していたが、昭和53年秋、思うところがあって岩見沢市に開業した。この際、恩師から開業はならんと破門を申し渡された。しかし、研究成績をまとめて学位も授与されたので破門は解かれたと思っているが、確かなことは分からない。

そんな私ではあるが、在局中から全国各地で開催される日本耳鼻咽喉科学会総会や関連学会には教授のかばん持ち役として毎年あちこちとお供をしたが、開業後も破門の身？ではあるが同行を許され、お陰で全国の有名教授の面識を得て貴重な意見を拝聴する機会に恵まれ大いに勉強になった。

教授は退官後の晩年も総会に一般演題を出題して周囲を驚かせ、また種々セミナーの講師も務めていた。そんな恩師が或る学会で昔からの教授仲間と年々会う機会が少なくなり「俺が最後かなあ」と話していたのを思い出す。私も恩師の晩年の年齢になり学会で同様の寂しさを感じている。この年齢になると遠隔地の学会に出席するのは正直億劫になるが、晩年の恩師の姿を思い出して私も出かけなければと思っている。厳しい師匠で私と顔を合わせるたびに「中村、勉強しているか。この文献読め。学会に行くぞ」といつも声をかけてくれた恩師の声が今でもはっきりと聞こえてくるこの頃である。

